

「生」と現代と：文苑

著者	北村，直躬
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 7
ページ	2 4 - 4 2
発行年	1912-11-18
URL	http://hdl.handle.net/2298/6392

「生」と現代と

北村直躬

温く結んだ甘き夢より、痛ましくも覺めて嘗むるは苦き現實の味である。暖い風に逐はれては、高原の小草を慕うて歩む小羊の、あの白き細毛の微動のなかに、淡い生の怡樂を味ひながら、果敢なき夢を遂つて徜徉つた牧者の國の、美しい憧憬の花園も、一夜の嵐に奪ひ去られては、たゞ残るは現實暴露の悲哀である。流れて絶えぬ時の手が堅く握つた「世紀」の斧は、信仰の血潮に滲んだ偶像を、情なくも跡なきまでに打壊した。彼方の空に朦々仰ぎし白雲が、いまは濁つた煤烟となつて、澄み切つたる清淨の胸に、何時しか浮き出たのは、斑をなした暗愁の血の色であつた。

一身を犠牲に捧げて、法を萬世に活さんと試みた者がある。然しながら、ロンドンとアンフィテアタとは、敗殘を語るばかりである。羅馬と正教とは昔語と消えたけれども、あの中世紀の沈んだ色の中に、多角の楯を握り占めたるホラチオの勇姿と、眼に溢る信仰の光を輝した十字軍の凄い叫は、人の胸に忘れ難い幻影を彫んでゐる。花は必ず散るべき運命をもつて咲く。神祕時代は哲學の時代となり、哲學の時代は更に物質の時代となつた。けれども物質の時代が何時までか續かう。Disillusion に一たび苦い味を知つてからは、世は再轉して、またも神祕の曙光は現れたのである。

神祕と言ひ物質と言つても畢竟は同じ人性の異なる側面に過ぎぬ。たゞ夫れが重んぜらるゝ側面の強さによつて決るのである。されば擬古主義といつても必ずしも冷やかな側面のみとは限らず、また象徵主義とて

も必ずしも、熱した側面のみとは限るまい。いや寧ろ熱の側面に没入しながら、なほ冷の側面を忘れ得ぬのが象徴主義の特色ではないか。彼の熱に走つて殆んど冷の側面を忘れた浪漫主義は、たゞ擬古主義の反動として起つた一時の現象ではなからうか。自然主義も同じく過度の現象である。前者が若しも左の頂端ならば後者は明らかに右の頂端であらう。この一の頂端から發して、他の頂端へと向つた變遷は甚しき鮮明の跡を遺してゐる。ナポレオンが一たび獨逸を睥つた時に、自ら劍を把つて *Wälder verwegener Schar* に投じた、愛國の詩人ケルネルの悲曲にあるツリニイは、眞に勇しい武將である。彼の孤守したスチゲットの城が、既に望なく見ゆた時、城中の人を集めて叫んだ言葉がある。

Kein einziges Herz ist hier im ganzen Kreis — das ist mein Stolz — das nicht mit frohem Mut

Das letzte Leben fuer sein Vaterland,

Den keiser und den heiligen Glauben wagte.

Dafuer euch dank! Gott wird es dort belohnen.

この純なる愛國の至情は、到底今日歐洲の天地には見らるまい。犠牲を喜んで天を慕ふ勇士の情は、實に熱の醇なるものではないか。彼の妻エファも夫に劣らぬ熱の子である。恐ろしい死の影が薜々と城を圍んで迫つた時、逃遁を夫より勧められつゝも、彼女は斷乎として、夫と生死を共にせんことを誓つた。

Ich weich nicht von dir! ich sterbe mit dir!

An deinem Herzen ist Platz, da soll

Des Jantscharen Kugel mich durchbohren.

Glaub' nicht, ich sei zu schwach, gib mir ein Schwert

Und neben dir will als Heldin fallen!

これ時代の園に咲いた、美しい一輪の撫子である。妻たる前に先づ人たらねばならぬと言つて、家と夫と兒とを捨て、去つた、イブセンのノラに比べて、今更、吾々は時代の異なる面影に、驚異の眼を見詰るのみである。物質時代と自由主義とは著しく個性の發展を促した。イブセンのピーアギントは追ひ絶つたイングリッドに言ふ。「吠わなつて下らない。お互に思ひ思ひの方向へ行かなければならないんだ」またモロッコの海岸の椰子樹の蔭で、偶々岸へ上つた海員に答へて言ふ。「人間は自分の事ばかり考へなくてはならぬ。荷をつけた駱駝の様に、他人の事に氣を遣ふ事は出来ない」とこれ冷かな個性の叫び聲である。

現代の何處を見ても、タンタルスではなからうが、生きよう生きようと効なき努力をなしてゐる。先づ第一に自分である。ともすれば敗者だ敗者だと叫ぶ聲が胸の奥から微かに響く。よしんば、それが二つの細胞が偶然に遇つて出来て來た自然界の自分であると、冷やかに思つても、生の欲求は、止め度なく生きよ生きよと鞭つのである。マートルリンクは言ふ。爾が人のために存するに先ちて、先づ爾自らのために存すべきだ。爾は與ふるに先ちて、先づ自ら得る所がなからねばならぬ」と。また女優ナチモバは言ふ。「私共がこの地上に住む以上は、私共は先づ自分の足で立たねばならぬ」と。

高塔の落つるが如くに、人間中心説が崩潰してからは、人々は熟々と萬象界の中の自分と言ふものの、位置を思つてみた。たゞ譯もなく、生れて生きて、終局は死んで行く。そこに何等の意義があらう。神が作つて呉れた祖先の末裔であると思つてこそ有難味はあれ、單に二個の細胞が、偶然の機會に遇つて出来上つた自

分であると思つて見れば、今日また明日と、物質時代の強壓に反抗して、無意義の生に飽くまで執着するの必要が何處にあらう。彼の青空を奔る白雲に、確と認めた天堂の美園も、覺めて思へば頽廢の世ではないか。唯一の引力を失つた吾が精魂は、果して何時は、安止の境地を得るであらう。たゞ魅するが如き強臭の中に意識を呼ぶは物質と歡樂の聲である。動々もすれば世界の波は、平凡の色をなして、この自己さへも奪はんとする。今にして思へば、愛他と犠牲とは、往古の遺物に過ぎぬ。敵多き今の世は、守るに難き自己である。よしや、生の意義は暗迷たりとも、氷原に深く埋れし白鳥の卵の如くに、凄乎として冷滅せる現代にありては、先づ生くべき自己の境地を索むべきである。これ現代人の著しい色調ではないか。或者はあらゆる問題を神祕に托して、直ちに走つて解放されたる官能の慰安を得んとする。頽廢の色調はこゝに起る。彼等は唯刹那の歡樂を味うて、現實の悲哀を忘れんと努むる。象徵詩人、神祕詩人は正しくこれが先驅である。彼等は、生の痛ましい半面に怯れて、神祕の深い蔭に隠れ乍らも、全く現實の地を離れ得ずして、鋭敏なる官能の奔放なる享樂を漁つてゐる。

然れども一面には冷靜なる批評家、科學者の一團がある。彼等は、嘗て千歳の迷夢を突破せし、人類史上一大異變の餘勢を利して、一舉眞理の標的を射んと努めてゐる。彼等は飽くまで明透冷靜なる立場に據りて一面神祕に隠るゝ怯者の態度を冷笑すると同時に、他面彼等の頽廢的情調の生理的根源を攻究して、現代の痼疾を救劑せんと企てる。奇激なる言辭を用ひて、時々彼等の狂的態度を諷刺する頃の醫師ノルドウの如きは正にその一人であらう。亞米利加の醫師モリスは曰く、結核菌は人を樂天的ならしめ、其作用は遂にスチブンソンの如き諧謔的天才を生み、大腸菌は人を悲觀的ならしめ、其作用は終にシヨーペンハウエル、ニ

イチエの如き沈鬱的天才を生んだ。カアライル、ルソウの如きも皆大腸菌中毒患者である。バイロン、モーバサン、トルストイの如き天才は、豊富な想像力を發生する一種の菌毒の中毒患者である。

しかも刺激を追うて、享樂に酔へる官能の人は、緩慢なる科學の進度を嘲つて、その前途の暗黒を叫んでゐる。ゴルキ一の書いた「太陽の兒」には能く穿つたる言葉がある。化學者プロタソフが化學の實驗に熱中してゐると、妻のリザがその室に這入つて言ふ。貴方は嘔吐です。人民は野獸です、貴方は自分が夢許り見て人民をあまり後の方へ取り残して了つたのです。貴方は小さい人、低い人、敵で圍まれて居ます。また死人の膚の様に、冷に切つた科學者の態度を、例のイブセンが強く諷刺してゐる、彼のビーアギントが後で難破せんとする船の上で、異様な風の男に遇つて、その男に金をやらうと言つた。すると彼の男が沈んだ聲で「それよりもた前の死骸を呉れ、科學の研究にするから」この答を聞いて無氣味な科學者だと呟いてゐる。

此等によつても現代の面影はほゞ視はれる。或者は能くまで冷靜なる理智に訴へて、生の意義を知らうとする。或者は痛烈なる情意に驅られて、自暴的享樂に趣かうとする。この相反したる趨向が、互に異なる見地に立ちて、各々その特色を主張せるは、寧ろ必然の歸結である。要するに理智と情意とは同一精神の異なる半面であつて、各々異なる要求を有するものである。たゞ或者は理智に長けてその要求に従ひ、或者は情意に勝りてその欲求に服す。即ち一は客觀的であつて一は主觀的である。此の兩者の勝敗は直ちに時代の大波動を形成する。凡てを不可思議の世界に藏めんとする神祕時代、また凡てを既知の法則に従へんとする科學時代は各々その波動の一である。

強大なる科學の威力が凋落せんとする時に當りて、不安なる現代社會の當然なる欲求は抑も何であらう。神祕を以て、愚蒙なる未開時代の迷想に歸し、凡ての宇宙問題を、その物質的見地に立ちて解決せんと試みたる自然科學は、忽ちにして、革命の渦雲を起し來つて、自然を征服し盡すの勢を示した。十八世紀以後の夥しき新發見は、暗かつた歐洲の天地に、美しきイルミネーションを點じたのである。生物學界の泰斗ウォレスは十九世紀を目して Wonderful Century であると呼び、新世紀の讚美者は、世界が粧へる新面目に、驚嘆と祝福との盃を揚げた。然し乍ら、翻つて冷かに惟ふ。勿論物質界の革新は、人類半面の欲求に隈なき満足を與へたであらう。しかも他の半面は、依然としてスフィンクス以來の疑問ではないか。のみならず、更に新なる幾多の疑問は、進むに従つて湧いて來る。此等の明快なる解決は、吾等貧弱なる人類の頭腦の能くする所であらうかと。

果然、人類の弱點は、こゝに曝露せられて、彼等は、恰も豺狼の叫に怯れた小羊の如くに、倉皇として、隱るべき暗面に身を沒したのである。神祕は再び此に發足する。物質論、決定論の冷酷なる宣言に、幾度か生の恐怖を味つた彼等は、靈界の存在、死後の生活問題を、恰も救世主の宣託ではないかと喜び、蒼茫たる砂漠の中の唯一なるオアシスとなして、初めて彼は枯渴せる胸の苦を醫したのである。

心靈的奇現象に對する迷信及其の研究は、古來人類が必然に荷ふたる問題の一つであつた。然れども近代心靈學に對して、モチーブを興へたるは、瑞典のエマヌエル、スウェーデンボルグである。彼は一六八八年一月廿九日、瑞典スウェーデンのスウェーデン邑に於て、スウェーデンの僧正の第二子として呱呱の聲を揚げたのである。博物學、數學、天文學、神學、生理學等通ぜざるものは一としてなく、礦學は特に彼の長する所で

あつた。諸地の大學に學び、一七三六年以後は歐洲列國を漫遊して、至る所その蘊蓄を披瀝した。然るに一七四四年四月六日夜半、彼は忽焉としてイエス、クリストの幻示を見た。彼の言ふ所によると、神は其折柴の衣を纏ひ、約三十分間彼の前に立つて、彼が第二の救世主たるべきを宣言されたのである。これが抑も彼が新生活の門出である。彼はこの後その新教義を布かんがために、或は神學的著述に従事し、或は自稱神佛となつて東奔西走し、遂に八十五歳を一期として、一七七二年五月廿九日英京倫敦に客死するに至つた。以上は彼の生涯であるが、彼をして今日の名あらしめたるは、即ち彼が千里眼の能力である。之に就ては今も次の様な傳説がある。一はゴードンブルクの或る商家に於て、ストクホルムの火災を豫言したことである。こは果して彼の豫言の通り、二日の後に實際に起つた。又た一は喪失した請取書が、彼の透視によりて、その所在を明にせられた事である。即ち瑞典駐割の和蘭公使が死んだ後、或る商人が公使夫人に對して、嘗て賣りたる銀器の代價を請求した。夫人は確かに、支拂を既に済せる事を記憶して居たが、生憎、その請取證が分らない。そこで彼を呼んで請取證の所在を、死んだ公使の靈に尋ねて貰つた。彼は數日の後に、それは書類函の抽出にありと回答したが、果して彼の豫言の如くであつた。も一つは、時の女王が彼を喚んだ時に、彼は女王と女王の弟との間に、嘗てなされた秘密の面晤を女王に告げたことである。この一事は甚しく女王を驚したと見て、女王は後で、あの事を知るは、亡者と予と汝とであると言はれたと記載してある。以上の如くして彼の特殊なる心靈上の能力は、少なからず時人を驚ろかし、彼のカントでさへもこれを信するに至つた。

然るに近代に至りて、レーマン及ヘンニングの二氏は、以上の事件に關して多くの記録を涉獵し、終に次

の斷案に達したのである。即ち此等の事件は凡て根底なき訛傳に胚胎し、事實の真相は全然之と異なるものである。之に關しては兩氏の實際の證明あれども此には略する事とする。なほ彼に關して、永井博士はその無稽なるを笑つて次の如き批評を下してゐる。「彼の經歷を見ると、別に何も不思議はない。彼は明かに一種の精神病者で、幻覺に富んで居たものに違ひない。況んや記銀によると、スウエーデンボルグは過度の手淫をやつた爲に、痛く神經系を毀したと云ふことである。コンナ御連は珍らしくも何ともない。近い巢鴨あたりにも絶えずゴロゴロして居るのである」と。

事の當否は暫く措き、此の如くスウエーデンボルグによりて點火されたる神秘の焰は、歐米至る所の靈界を熾きて、吾等が生存せる地上以外に更に精靈の世界あるを思はしむるに至つた。この奇異なる潮流は、好事なる御幣擔、異を立てる學者によりて、益々助長せられ、年代と共に非常なる勢力をなすに至つた。その勢力の傳布と、彼等の欲求とに應じて、太陽を送つた暗天に、刻々増し來る星屑の如くに、至る所にメデアムは現はれたのである。先年吾國にて千鶴子の出づるや、一時に廿數名の千里眼を生じたと同じく、簇々として自稱メデアムは生れ來つた。殊に、神秘的傳説に富む迷信の天地亞米利加には、有名なるフォックス姉妹を魁として、彼の降神説は遂に多數の信服者を克ち得たのである。彼等は超越的靈界の存在と、對靈界交通の可能とを叫んで、あらゆる不可思議なる現象と奇異なる事件とを示して、明らかなる新時代奇跡の眞否を問つた。冷靜なる科學者は、之を荒唐無稽、單に迷信者を釣る一の詐術なりと喝破した。然し乍ら眞理に忠なる一部の科學者は、藏されたる幾分の眞理を考察せんがために、此に對して過敏なる注意を向くるに至つた。

就中、之が研究に熱心なるは英國と佛國とである。英國に於ては、之が爲に特に The Society for Psychological Research の組織を見るに至り、該會員の監督の下に幾多の實驗は試みられた。此に向つて全幅の努力を傾注し、以て自家獨特の神秘的人生觀を立てたるはマイヤーズである。

多くの神秘的現象は、物理的と心理的とに分類さる。前世紀にありて、ダミールホームは體の浮揚及體の延長といふ極めて奇なる現象を示した。今世紀にありて、エウサビア、バルラデノは机の上昇及印像の出現といふ不思議なる實驗を行つた。なほ心理的方面に於て、バイバア夫人は獨特なる地歩を占めてゐる。夫人は靈界との交通、死者との會話等極めて恰好なる材料を神秘主張者に與へてゐる。然し乍ら此等の奇なる諸現象は、多くは嚴密なる科學者の實驗に遇うて、その醜なる半面を曝露した。メデアム等は能力の勝利を誇つて、學者等の驚嘆を博するに急なる余り、遂に恐るべき詐術を交へたのである。しかも、その幾部は難解なる疑問として、眞理の有無に迷へる學者等に對して、有力なる問題を提供してゐる。

劍戟と殺戮との戰慄すべき慘果をも辭せずして、男子功名の爲には、喜んで十數萬の生靈を犠牲に供したるナポレオンも、北國平原の舊都モスコウの雪の一夜、寒を怕るゝ犬の叫を聞いては、思はず泣いたといふ話がある。また、ギョツチンの凄き響に、忽ち時人の膽を奪つたジャコベン黨の巨魁ロベスピールが、嘗て判事として死刑を宣告したことがあるが、その日に彼は恐怖の余り遂に官を辭したといふ話がある。熱するに易き情意の裡には常に冷かな理智が潜んでゐる。妖艶を誇る櫻の美花も、いつかは散つて一たびは冬枯の時期に遭ふ。學界の思潮も亦常に然りではないか。心して時流の趨向に留意するものは、同じく「生」の洋へ

と向ひながらも、南國の椰子實を浮ぶる暖流と、雪國の氷山を運ぶ寒潮とが、各々異つた色をなして動き行くを、必ずや看過せぬであらう。神學、心靈學及び新文學は、迷濁の中にも一の明るい渦を卷いてゐる。また生物學、生理學、理學は全く新たな圈を描いて、異る渦をなしてゐる。甲は乙を嘲つて叫ぶ。お前達は眞理、眞理と頻りに渴仰するが、何時は果してそれを見出し得るか。また眞理と言ふのが抑も怪しい、昔は水をポンプが吸ひ上ぐる事實を、アリストテレスの「自然は眞空を好まぬ」の言葉で説明してゐた。それがトリセリによりて見事壞れたではないか。純粹なる眞理は何處にある。お前達には、俺達の神秘の味がわからぬのか、あの微妙な靈の叫が聞けぬのか。乙は甲を冷笑して答へる。一體、神秘の蔭に隠れるなんて、お前達は余り卑怯である。抑も、神の靈のと叫んでゐるが、俺達の確な目には一つも見えぬではないか。畢竟、それはお前達の無智な空騒である。お前達には、俺達の深奥な學理が解せぬのだ。

要するに彼等は鮮明なる旗幟を立て、争つてゐるが、なほこの外に、二三の不徹底な態度も見ゆる。即ち飽くまでも、自然科學の基礎に立ち乍ら、一方には純思索の絆を辿らうといふのである。假令、純なる眞理が以上の何れにあるにせよ、吾人は思ふ、情意に強き人ならば、懷しき憧憬の影を逐うて、恍惚と、美しき夢の花園に流浪ふもいゝ、また理智に勝つた人ならば、冷靜な實驗と理論との道を辿りて、懷疑に泣く人のために、眞理の光明を齎すもよからうと。

この弱い人類に對して、宇宙が與へし問題の中にありて、進化せる近代人の頭腦に、最も暗き蔭を残せるは三つの大なる疑問である。第一は力と物質との本質である。第二は無機物より有機物の生じ來りたる経過である。第三は複雑なる人類頭腦の作用である。

現代の進歩したる文明的敎育を享けたる人は、凡て宇宙間の事物は、力と物質との組織せるものなることを疑ふまい。然れども、その本質の何たるかに至つては、今日の自然科學は未だ十分なる説明を與ふことが出來ぬのである。さは言へ、學者の熱心なる努力が漸次眞理に近きつゝありて、少しく曙光を認むるに至つたことも、また疑ふべからざるものである。之に就ての研究は、余りに専門的にして、純物理學の範圍に屬するが故に、こゝには之を略々するを止めて、たゞ、力の何たるかを解明しやうと思ふ。然し乍ら、淺薄なる頭腦の獨斷を避くるがために、學界の諸説を紹介するに止めよう。

ローマ大學の敎授であつた、獨乙の生理學者モールショットの説によれば、勿論、力は決して神ではない。また、物質的根底を離れて獨立せるものにあらず。力は物質より離るべからざるものであつて、永久にその中に潜める性質に外ならぬ。力を以て、物質以外に在りとなすは、これ空なる想像である。伯林大學敎授にして、ミューラアの後繼者であつた、同じ獨逸生理學者ゾボア、レイモンドは、實驗的研究の鼻祖であるが、彼は有力なる斷案を下して曰く、力と物質とは、物體の抽象より生じたる異なる二面である。この他ヘツケル、マイヘル等も皆同様の見解を有せるのである。「物質を受動的に見て、力は之に作用するものなりと思ふは甚しき誤解であつて、畢竟、これ神秘的觀念より來つたのである」とはフイグノリイの言葉である。チュブリン大學の敎授であつたブエフネルも、また次の如く言つてゐる。力は物質の性、換言せばその能力とも定義すべきである。即ち力とは物質又は分子の運動及運動狀態、又はその能力であつて、更に嚴密に言へば、實際の運動又は起り得べき運動の原因を表明せるものである。こは本質に於ては決して變化することなし。恰も眼なくして視る能はず、頭腦なくして思考し能はざる如く、物質なくしては、力は決して存在す

ることなしと。これヘッケル等が、時人の視線を集めたる新一元論の根底である。即ち從來の如く、物質と力とを別箇のものとすることなく、寧ろ兩者は一本質の異なる二面なりと觀じ、全然舊來の二元論の本壘を陥れ、更に唯心、唯物論、活力説の偏狹を排斥して、此に新たな総合的哲學觀を樹てたのである。

あのエデンの園に棲んだといふアダム、イブの話は、たゞ憧憬時代の神話に過ぎぬことは、明らかであつて、進化論の頁に一たび眼を注いだ人は、よも神の創造を信すまい、人生の研究に發足したる人の、進化の理路を辿つて歸着する所は、必ずや細胞と原始生物とであらう。これ生物學、生理學の發展が、明らかに吾人に教ふる理路である。然し乍ら此に至つて、道は俄かに暗くなる。ヘッケルの所謂モチーレンに發して、高等なる吾人人類に至る進化の道程は、十九世紀に輩出せる學者によりて、宇宙真理たるの證明を獲た。また、原素より出で、複雑なる有機化合物を作れるは、化學上に於ても殆んど疑ふ能はざる所である。たゞこの兩世界を連ねべき明確なる航路を發見し得ざるは、甚しき全人類の遺憾である。世は今や第二のコロンプスを待つてゐる。今日にありては、無機有機の兩界を一貫せる進化の歴史あることは、既に近世諸大家の相一致せる所であつて、理論を避けて、實驗的根抵の上に立たんとする自然科學者が、未だ満足なる事實と現象とによりて、之を證明するキイを有せざるに止る。

然し乍ら、如何に明徹なる真理と雖、其の當初にありては常に二三の異論あるを免れず。生物發生に於ても亦然りである。悲觀論界は曰く、これ人類幾千年間の疑問ではないか。而も未だ適確なる解答あるを聞かない。これ天與の秘密であつて、是を解かんとするは寧ろ無益の努力である。之に反して、強烈なる智識慾を有する他の論者は言ふ。否、發生史は決して不可解にあらず。只その攻究の困難なるのみである。歩々の

研究は何時かは解明の域に進むであらうと。同じくこの最後の見地に立ち乍らも、二元説は有機体と無生物とを以て、永遠に兩立せるものとなす。ヘルマン、リヒターは曰く、無限の宇宙は多くの無機體と共に、また有機質胚子によりて滿さる。若し、この至る所に分布したる生活胚子にして、その發生に適當なる條件を具備する天體に達する時は、彼は發育して、此に一の有機界を現出するに至ると。十六世紀の末年に生れたる英京倫敦の一醫師ハアペイは、彼の血液循環の理を發見して、生理史上一大革命をなしたる男であるが、彼は「凡ての生體は生體より發生する」と言つたことがある。リヒターは該胚子を以て生活細胞となし、凡ての生體は永い間に細胞より發生したるものであると言つてゐる。植物學者アントン、ケルネルも同じく、有機體の不滅なること及び全く無機界と無關係なる説を持してゐる。なほ有力なるは、ヘルムホルツ等の説であつて、彼の説は、宇宙間を運動せる隕石は有機體の胚子を含むことありて、この胚子が都合よく地球又は他の天體に達した時に、其處に生長したのであるといふのである。然し乍ら、ヘッケルの批評によれば、宇宙の物理的狀態は此の如き有機生體の生活を許さぬが故に、こは論理的にも矛盾せる説である。

同じく有機體不滅説を持し乍らも、フエヒナア及ブレヤアは全く別種の見解を立てる、前者は意識は宇宙並に天體を問はず、至る所に瀰蔓するものにて、個々の生體はこの大有機體の一部であると説く。後者は更に之を布衍して、流動時代の地球を以て大なる有機體なりとし、その回轉運動を、彼の生活なりと説き、その冷却と共に、先づ金屬を、次に炭素化合物を生じ、最後に蛋白質及プラズマを出したと結論してゐる。然し乍ら、こは全く生物學上の生の意義を無視したる説明である。

以上は無機物及有機體の兩界を以て、全然同一系統なりとし、一本質より漸次進化し來りたる階段に過ぎ

ずとする一元説に對して、宇宙を以て、本來相異なる兩界を以て成立するものとし、有機體を以て不滅永遠のものとなす二元説の概略である。

強き歡樂の境地を退きて、月もなき冬の一夜、靜かに思を生の疑惑に注ぐ人は、神秘を宿したあの冷かな星の瞬に、口に言ひ得ぬ寂しさを、必ずや染々と味ふであらう。この人達は、丁度スキピオの報知を待ち焦れたローマ人のやうに、一時も、闇を照す曉の光を待たぬ時とはあるまい。これ眞理を愛する人の當然の態度である。然し乍ら、今や神秘の闇の中に、朦げながら一條の理路は、廿世紀の舞臺と共に、苛つた人々の前に展開せられた。ヘッケルの自生説はそれである。抑も有機的生活體の特異なる運動現象は一の物理的並に化學的作用であつて、こは一定の溫度以内に於て行はるゝものである。勿論該溫度以外に於て生存する能力あれども、畢竟これ一時の潛伏狀態に過ぎぬ。然るに、地球創造の歴史に稽ふるに、地球は長き間甚だ高温なる狀態にありしが故に、この間に於て有機體の生活せしことは到底想像されない。たゞ、地殼の外面が沸点以下に降下したる後に、初めて生活體發生の前條件として、液狀の水が生じ來つたのである。而してこの經過に現れた最初の化學作用は、蛋白質及プラズマを作つた接觸作用に相違ない。かくの如くして生じた最古の原始生物は Plasmidome Moneren であつて、一個の Homogen 原形質球である。細胞は初めてこの原始生物より發生するに至つた。以上はヘッケル主張の、ほんの筋書であるが、彼はなほ、Moneren の發見及植物同化作用の研究により、益々自説の証明に努めたが、更に近年に至りネーグリイ、フュリユウゲル等

の説によりて、愈々其の眞なるを確信するに至つたのである。後者のチアン説によれば、生体の生活力は全く蛋白質の化學作用に歸すべきものであつて、生体内の蛋白質と普通蛋白質との差異は、實に自己分解の能力有無に存する。而して自己分解の能力はチャン基の含有に起因するものであるといふのである。アクス、フエルボルンは之を敷衍して曰く、原始の蛋白質はそのチャン基中に、同種の成分を誘引する力と傾向とを有する特性がある、之れ即ち該成分を化學的に分子に結合して以て、無限に生長せんがためである。いま大略ではあるが以上の諸説を總合して、冷靜なる觀察を下すならば、生の存否は單に特異原素の有無によるのみであつて、即ち生物及無生物は全く同一系統の異なる階段に過ぎざることを了解するであらう。此に於て吾人はフツェルの所謂「生とは濃密なる原素分子の特別なる運動状態である」といふ最後の斷案に到達する

自生説に、少しく理智の眼を睜いた人達は、又も再び最終の難問に逢着するであらう。千餘年の哲學的爭鬭を捲き起したる疑問の根底は、今日なほ依然として疑問の黒衣を脱がない。人類の頭腦は近代の武陵桃源である。

精神作用は、人生間に起るあらゆる風雨の水源であつて、複雑なるその器官と、高尚なるその作用とは、實に宇宙の花として、吾人が自然に誇る特長の一である。然し乍ら、之が作用と経過とに就て、正確なる實驗を施すことは、到底不可能であつて、實に吾人唯一の憾と言はねばならぬ、勿論、慘忍な科學の刃先を免れた、唯一神聖の境地と言は言へよう。然し乍ら、唯々この一帯の太古林あるがために、人類自由の交通

は甚しく阻害せられて、無用の争闘は永い間彼等の精力を空費した。しかも、この精力の空費が、吾々の爲に遂に何等の解決を克ち得たであらうか。神祕論者唯一の根底は即ち此に在るのであるが、この結んで解けぬ疑惑の糸を、科學者は果して如何に斷ちつゝあるか、次に少しくその大略を語つて見よう。

天然のペールに、いとも巧みに裏まれた自然力を、今日の如く美妙な機械力に利用して、人類生活の型式をその基礎より顛覆しながら、あの驚くべき文明と開化とを齎したるものは、これ人類自身の思考力であつて、いま、プフチルの言葉を藉れば、思考とは、中央神經の要素實質に特有なる一般的自然運動中の特別なるものである。これ新一元論を信する者の、必然到達すべき歸結である。シッスの實驗によると、思考に當りて腦神經は少なからぬ熱を起すのである。故にまた外界の感觸によつて導かれたる運動の *Austrahlung* が、る皮質の細胞間に起つたものが即ち心理作用であるともいへよう。兎に角に、心理作用を一の實體であると觀たのは、過去の果敢なき夢であつて、かの所謂精神、心、思想、感情、意志、生命等は寧ろ、生活質の特性能力又は作用を表明せるものである。換言せば、物質的實在體に基ける *Weisheit* の結果である。

以上はたゞ、心理作用の根本的概觀であるが、彼の單なる外部の知覺に始まりて、遂に高尚なる思考作用に至る生理的經過は何うであるか。此に就て、嘗てブルネルは次の如き説を立てたのである。

近代の實驗の示す所によると、從來人が無機界に於て認めたる力は、亦神經系の生理作用にありても、重要な作用を爲すものであつて、神經流 *Nervenstrom* と電流とは、全く同一なりと見做さるゝのである。各神經は神經を構成せる發動機分子 *electromotorischer Molekel* の運動より起る電流の根原である。と見らるゝ。而して、この電流は絶えず神經内に生じ來るものである。故に神經は單に導體たるに止ら

す、實に電流の發動者であつて、内部即ち Nervenmark 及 Axenzylinder に起る新陳代謝は之を助成するのである。若し神經興奮する時、換言せば心理作用行はるゝ時は、該電流は減じ或は消滅する。之に反して安靜なる時、即ち何等の心理作用行はれざる時は、力は益々蓄積せられ、electromotorische Kraefte は次第に強大となる。以上に見る時は、神經力、神經作用或は神經運動は電流の變化なること、及び、静止より運動に移らしむるために設けられたる、自然界の Apparat の一なることは否むべからざるものである。神經は内部に起りたる化學作用の結果として電流を起し、更にこの電流を神經作用に轉化するのである。即ち、凡ての心理作用は、反覆して順次に進みたる知覺、換言せば、神經によりて傳へられたる外界の印象から、次第に發生し且發展し來つたものである。これ進歩せる心理學者の既に一致せる所である。故に、心理作用が自然に於ける一般の原力より由來したること、及びエネルギー不滅の大法則に支配さるゝことは、これ明らかなる事實である。

然るに近世に於ける醱酵作用の發見は、更に新たな見解を立つるに至つた。その發見者は佛國化學者バステウアである。彼は化學原素の實驗中、付らずも醱酵素を發見し、その後の研究は遂に左の斷案に達したのである。

Das Leben ist eine Reihe von Gärung.

彼が、一旦忽然として醱酵素を發見するや、之に對する獨乙科學者の注目と攻究とは、全く生理學者の面目を一新するに至つたのである。即ち、唾液及びその他の消化液、肝臓及び肺臓内の作用等相襲ひたる發見は、愈々彼の斷案に大なる裏書をなした。彼は肝臓内の周密なる研究の結果より推して、かの腦皮質内に起

る腦活動も一種の醗酵作用であると結論した。詳言すれば、消化循環、呼吸の各器官は、各々特有なる醗酵素を有し、此等によつて各自の分業的作用を営めるものである。即ち器官の一なる頭腦も、彼に特有なる醗酵素を有して、一種の醗酵作用をその皮質内にて行ひ、その結果として吾々の心理作用は生じ來るものである。

崖もなき大洋の、山となり海となりゆく紆^{うねり}の上に、低く垂れたる密雲の、死せるが如き靜謐の中を、たゞ的もなく流浪^{まよ}つて、思ふが儘に生の甘汁に酔つて見たいとは、騷擾と噪音に疲れ切つた人々に、いく度か繰返された望であらう。意義もなき空想の所産であると、嘗て蔑んだ神秘の國が、また或る時は懐しい空とも思はれた。たゞ、異教の地にピーターの大寺院を築き上げたロヨラの熱なきを憾とする。異臭に満ちた實驗室^{ラボラトリー}の明るさを慕つて、醇乎として醇なる科學の Method に、ある時は宇宙の謎を解かうとした。然し乍ら、斷乎として基督と神とを否定したフイヒテの慨を思つては、悲しさは吾が身の無能と凡愚とである。迷ひ迷つた現代人は、路もなき斷崖の前に立つて、たゞ慟哭に暗愁の傷を和ぐるのみである。歡樂を逐つて疲れた今日の日は、よしや期待に暮れ去るとも、來るはまたも單調の明日ではないか。さりながら、弱々しい胸の蠕^{うご}が、暖國の雪と消^きれ去らん日は、これ眞に生の意義を味ふの日であらう。吾々はその日その日の單調に堪へ得ぬ程に飽きながらも、唯最終の日のために、頽廢と暗愁とを敵として、不斷の努力に一道の光明を得るのである。

罷まぬ進化の道程は、何時かは千古の疑問の鍵を、吾等人類に與ふであらうか。この祝福すべき最後の

日は、たゞ吾々の努力の裡に、その最適の肥料を見出すのである。努力よ、汝は眞理の路を開く唯一のビオニエルである。最後に吾々は再びスキートなトーンに富んだ一の斷案を高唱して筆を擱く。

Das Leben ist eine Reihe von Gärung.

(一一〇、八)

夏　　から　　秋　　へ

重

たとへば、一角獣ユニコーンの瞳のやうな、南光星カンライボウの光りが、エルサレムの街まちを追はれた贖罪羊スケイフ・ゴートのやうに、トボトボと辿りゆく隊商カラバンの群れを淋しう照しいたす、あのアラビアの砂漠を偲おもはせて、縣廳グンの前の大街道は焦茶色の月影に、盛んに砂煙りをあぐるのであつた。廣告隊でも練りゆくんだらうか。トラムベツトやクラリオネツトの發狂した様ような、あの未來派フューチャーユアリストのオーケストラでも聞くやうなワイルドな旋律メロディは、紺緑の色に濃き紫を湛たへて更けゆく夏の夜の空氣を動搖めかして、窓框の塵に微かな波動を傳ふるのであつた。

私は圖書館の窓に白痴のやうに悄然ほんやりと凭よつてゐた。眼に必かならずむ様な二號活字の強い刺戟に現るゝ、九重の御空の御惱みには、破れ果てた胸にも、新しい悲しみか、冷油の様に湧いて、思へば悚然ぞつとするプレデスチーイシヤンの閃めきは、枝垂しだれ柳の葉蔭かげに激はげむアーク燈の紫の陰影に躍つてその黒い牙を見するのであつた。あの朝である。いつもならば、明け易い短か夜を名残るバナナの様な甘い朝星の影が、古鏡の色に深う沈む朝顔の、花の露にも宿るであらうものを、是れは亦、染色の雲隈もなく立ち罩めて、小雨の音がバラバラ